



暮らしの風景

不在の風景が 問いかけるもの

【福島県南相馬市小高区】

原発二〇^〇キ圏内の警戒区域。

人の姿の見えぬ農地は、

見渡す限りの水に覆われ、

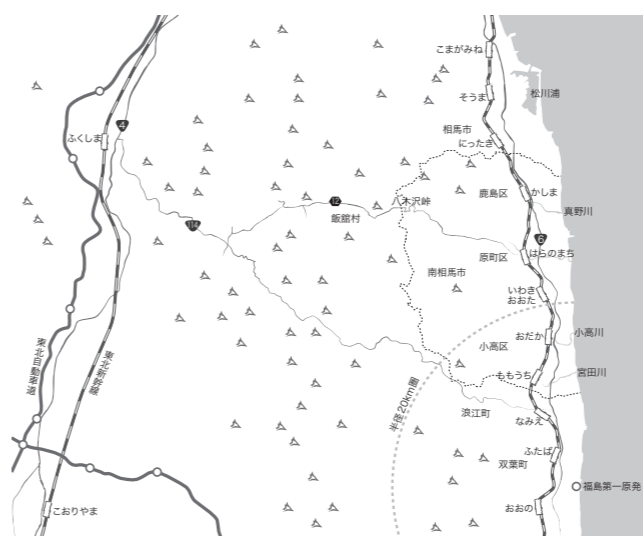
縄文時代の海を思わずにいられない。

驚くほど多くの野鳥たちの群れが、

羽音を響かせていた。

文——佐々木葉 *Yoh Sasaki*

絵——佐々木悟郎 *Goro Sasaki*



聞こえてくるのは、風の音。鳥の声。あれは？遠くで飛び立ったたたくさんの鳥たちの羽音だ。それだけ。なぜなら、ここには人っ子ひとりいないから。南相馬市小高区。東京電力福島第一原発から半径二〇^〇キ圏内の警戒区域である。

太古の風景ふたつの時間の断絶

二〇一一年十一月、許可を得てこの地を巡った。JR小高駅西側に延びる商店街は映画のセットのように人気がない。大きな蔵が倒壊し、見事な瓦屋根が目の高さにある。しかし大方の商店はそのまま。魔法にかかったように眠っている。

緩やかな起伏を貫く道路を南へ進む。一面に草に覆われた平原に点々と見え隠れする自動車。津波がさらったものだ。常磐線の線路も草ぼうぼう。さらに起伏を越えていくと、次に現れたのは、水面。つんつんと背の高い草が突き出ている。その向こうにはビニールハウス。地盤沈下であると気づく。そこからさらにもう一度ゆるい傾斜を上り、橋を渡ったとたんに飛び込んできた光景に息をのむ。広大な水面を、ゆるくカーブした一本の道が左右に振り分けていた。ここはどこだ。私はどこに迷い込んだのか。海原を進む道としか見えないこの景色は何なのか。

小高川河口部の葦原と水没地。背後の山並みは阿武隈山地。コンクリートの瓦礫が点在する中に無数の鳥たちが羽を休め、はばたく。2月にはオオハクチョウの群れにも出会った。野鳥の楽園である。



暮らしの風景



車を降りて佇む。感覚に多少の落ち着きに戻ると、水面からわずか見えているものがガードレールであったり、捻じ曲がった鉄骨であることが分かる。大規模な地盤沈下と浸水。かつてここは広大な水田であったこと。津波がさまざまな構造物を破壊したこと。そして音。人の暮らしが失せたこと。

海岸に車は近づく。裏法がごっそりえぐられた堤防と、孤立した数本の高い松の木。完全にちぎれた堤防の内側には、頑強なコンクリートの壁と太い鉄のパイプが位相を崩している。排水ポンプ場だ。山側を振り返れば、逆光にきらめく水面。そのなかにシルエットを晒すのは、ばら撒かれた消波ブロック。

ようやくすべての辻褄が合う。かつて浦であった場所を水田に変え、水路を固め、ポンプを使い堤防を越えて海へ排水する。サーフィンのメッカでもある太平洋の波が洗うコンクリートの堤防は、さらに消波ブロックの防護を必要とした。松林の力も借りながら耕作可能な土地を広げる。日照時間の長いこの地は、優れた農地として効率よく使われていた。そのため一切の造作が、一瞬で失せた。時が大幅に巻き戻されたのである。大地は、かつてそうであったであろう姿に戻った。その上に載せられていた人為の痕跡をばらばらと鏤めながら。

あの津波によって同様な現象が起きた地は他にもあろう。しかしここ小高区においては、大地の攪乱が起きると同時に、人が立ち入らなくなるという、もうひとつの時間の断絶が起きた。その結果、野鳥の楽園となった。

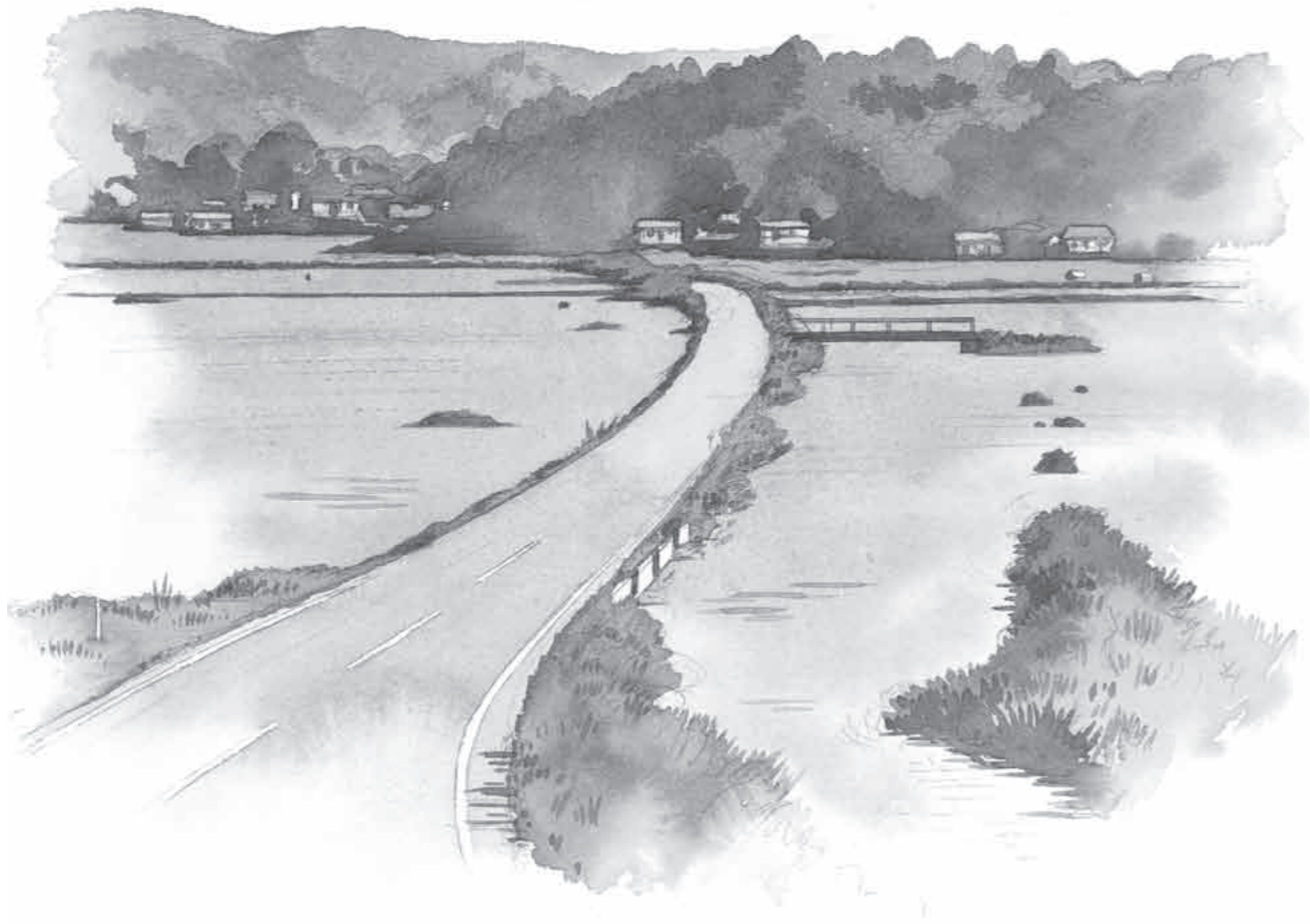
水没した農地の風景

美しい。正直、そう思った。いく層にも重なる山並みを遠く望み、きらきらと輝く水面。人為をまったく感じさせず自然に配置された島のような塊。水際には葎が揺れ、たくさん水鳥が羽を休め、気ままに羽ばたく。空は広く、青い。縄文時代あるいはそこまでのぼらなくとも、構造物が硬く人工的になる以前の風景は、きつとこんな感じだったのだろうと思う。しかし、その風景にまぎれた塊に焦点をあてれば、津波の破壊、失われた人命、そして人の不在の原因を突きつけられる。自然と文明とについて、これほど多くの、深く、複雑な問いかけを重ねもった風景が、他にあるだろうか。人間の暮らしと生態系とについて。技術と社会とについて。永遠と一瞬とについて。過去と未来とについて。記憶と忘却とについて。命と死とについて。この地の風景は問いかける。

二〇一一年三月十一日と十二日に、この国の一員として立ち会った私たちには、この風景を、見つめ、測り、記録し、語り、伝え、見守る義務があると思う。一日も早く元の場所に戻りたいと願っている人とともに、世界に例のない、この風景にしかできないことを考えたい。時計の針を地震の直前に戻すことはできない。いくらか放射線量が減ったからといって（実際すでに海沿い地域の値はより遠い地域と大差ない）、一度起きたことと一年間の放置は、復旧復興の前提を大きく違えている。もちろん小高区のことを水没した農地の風景だから語ることはできない。まちなかの、集落の、インフラの、海辺の、それぞれが受けたダメージの痕跡は生々しく、心に刺さる。例えばJR小高駅の脇に、折り重なるように停められたままのたぐさんの自転車。その籠に草が絡み、枯れている。言葉はない。よそ者に分かるはずなどない出来事。そうした見えないことが存在していることを想像しつつも、この美しく、重く、深い風景を軸に据えたこの地区のこれからの議論する必要があるのではないか。

二〇一二年二月。再び同じ場所に立った。商店街の建物の倒壊は進み、道路の陥没も増えた。水位はやや低かったが、鳥の数はさらに増えていた。堤防の暫定復旧工事が始まっていた。議論は急がれる。

ささき・よう●一九六一年、鎌倉生まれ。早稲田大学建築学科卒。東京工業大学大学院修了。早稲田大学創造理工学部社会環境工学科教授。研究室およびブログはyohlabで検索。



宮田川下流域の井田川浦干拓地は、かつての堤防であった道を残して完全に水没している。この地域は福浦村と呼ばれていた。時間が巻き戻された風景。